

消えた100歳の家族が問題だ

お盆の帰省で、親の背中が小さくなっていくことに気づいたでしょう。

それでも、都会から子や孫が遊びに来たので、目いっぱい元気を出して歓待してくれたはずです。

皆が帰った後、急に寂しくなるのも、この時期です。

今こそ電話することを勧めます。

100歳以上の所在不明者が数百人もいるという現実をいかにとらえるべき



か。マスコミは行政の怠慢のせいでしょうか。孤独死と

だと言いますが、20年、30年は、独居者が誰にも気づかれず死ぬこととされてい

知って当たり前前

上原喜光

介護ガイド帳



孤独死とは、家族がいるのに相手にされず、形式だけの葬式を挙げられるような人たちなのです。

話は飛びますが、15日に全国戦没者追悼式に行ってきました。兄弟や夫の写真を胸に下げている人たちを

見て、この家族愛はどこへ行ったのかと思いました。

例年、靖国参列ばかりが取り上げられますが、家族について考える絶好のチャンスといえるかもしれませ

戦後65年、国や行政が国民を引っ張って経済発展を遂げましたが、これからは自分たちで行動を起こす、自助の時代になっていくべきです。自助といっても、自分という意味ではなく、家族と置き換えてみれば分かります。80歳、90歳になつて介護が必要になつた人

に子や孫が知らんぷりではいけない。都会はもはや共助、公助が限界ですから、家族が重要なのです。

では、どうすれば家族愛は育つのか。自助と地域が行う共助の中間が大事です。愛知県高浜市で「168人（ひろば）委員会」という官民の街づくり組織がありました。今は活動休止中なのが残念ですが、小学生以上なら参加でき、子どもたちが放課後を過ごす場所を子ども自らが企画したりする。先日、民生委員の機能崩壊を書きましたが、新たな手法が必要です。（全国介護者支援協議会会長）